東日本大震災　MSW 災害支援ニュース

JASWHS　公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

令和５年２月２日　第 12 巻（第３号）

発行：東京都新宿区住吉町 8-２０ 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム　TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

巻頭言

１．包括的･重層的支援システムとコミュニティソーシャルワーク研修を開催して

２．石巻から日本医療ソーシャルワーカー協会が退いたら？（その１）

３．石巻市・石巻市社会福祉協議会主催「地域福祉講演会」に参加して

　　―　令和４年度「地域福祉講演会～地域の支え合いを考える大会～」　―

４．石巻だより

５．災害支援チームからのお知らせ

６．災害支援ニュース発行のお知らせ

編集後記

◇　巻頭言

石巻災害支援チーム 統括責任者　笹岡　眞弓

2011 年は辛卯のうさぎ年でした。辛卯は天変地異が多いと言われているとのことです。それから十二支がめぐり、今年の干支もウサギです。今年は癸卯、癸（みずのと）は十干「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の最後です。希望を持ちながら次に託す。まさに私たちの活動を次に託すときが訪れたのだと思います。いきなり古い話を持ち出しましたが、大いなるときにわれわれの営みもまた委ねられているのかもしれないと、このところ思います。年を経たせいなのかもしれないと思いながら、石巻の「復興」に、よそながらでも歩みを重ねてきた身には、時の流れを空疎に、あるいは指から滑り落ちる砂のように感じてしまうのです。

私たち医療ソーシャルワーカーの仕事は、量的に見ればささやかなものだったかもしれません。大いなるときの支配のなかで、しかし人々を支える力は確実に着実に根を張ってささやかな力は蓄積されてきました。3 月 11 日を振り返り次に備える試みは大事なことです。同様に 12 年を経て、経たからこそあらわれた「痛み」にどのように併走できるのか、ソーシャルワーカーの力量が問われる時期だと自覚することも重要なことだと思います。

空疎というのは言い過ぎだったかもしれません。ささやかな力の蓄積を感じながらでもなお、謙虚に慎重にこの地を去る前に、やらなければならないソーシャルワークの足跡を形として残さねばならないという使命感を過剰に感じているのだと、自らを奮い立たせます。

最後までご支援とご指導をお願い申し上げます。

１．包括的・重層的支援システムとコミュニティソーシャルワーク研修を開催して

∞ ∞

石巻災害支援チーム 現地責任者　福井　康江

∞ ∞

１．石巻市地域包括ケアの経緯

石巻市では、震災後の平成 25 年 8 月に包括ケアセンターが開所され、開成・南境地区の仮設住宅において地域包括ケアシステム構築のためのモデル事業が全国に先駆け開始されました。10 月には、市内の保健、福祉、医療、介護、生活支援、地域コミュニティなどに関わる関係者によって、「石巻市地域包括ケア推進協議会」が立ち上がり、平成 26 年 3 月には対象期間を 10 年とする「石巻地域包括ケアシステム推進計画基本構想」（以下、基本構想と記す）がまとめられました。

基本構想をもとに、平成 27 年度から平成 29 年度までを、第 1 期、平成 30 年度から令和 2 年度までを第 2 期として、地域包括ケアシステム推進実施計画が施行されました。

第 1 期では当面の支援対象者を高齢者としていましたが、第 2 期では国の地域共生社会を推進とする政策に沿い、新たに障がい者福祉、児童福祉、生活困窮者支援などのより広い範囲での支援体制を構築することが挙げられました。

また、第 2 期の実施計画の策定において、見えてきた課題の一つとして、コミュニティの再生の問題が取り上げられおり、その中で、「東日本大震災の被災者の多くは避難所での不自由な生活の後、応急貸仮設住宅等への入居を余儀なくされました。震災前にあった地域コミュニティは崩壊し、リーダーの担い手不足や、被災者の孤立も起こりました。（中略）コミュニティ形成を加速させるため、市や社会福祉協議会、関係機関等が一体となったサポートが重要となっています。」と述べられています。第 2 期の終了以降では、地域づくりにおいて、「自助」「互助」の意識を高めるために、地域コミュニティを基盤とした地域住民相互の顔の見える関係づくり、助け合いや支え合いの活動を推進するために、地域の自主的な活動の後押しや地域力の底上げを図るとしています。

２．研修会の企画から実践へ

令和 2 年度より、大橋謙策先生からご教授を頂きながら、石巻市での災害支援活動のまとめの作業を開始しました。その中で、かかわりのある行政機関の方や社会福祉協議会の職員の方へインタビューをさせていただいたり、グループワークを行ったりした中で、課題となったことは“今後の包括的な支援システムをどう構築してゆくのか”ということでした。

地域福祉・地域共生社会の本丸である社会福祉協議会が行政機関と協働することが、どうしても必要ではないかとの思いを抱えていた時、何よりありがたいことに大橋先生から「合同の研修会を開催してはどうか」とのご提案をいただき、大橋先生が作られている研修プログラムを基に企画を進めることになりました。まずは私たちの研修会開催の意向を伝えることが重要と、委託担当課の方にお骨折り頂き市長と面談をする機会を設けていただきました。また、社会福祉協議会の方々とも複数回話合いを持たせていただきました。その結果、市役所職員の方、市の委託事業所の方、圏域の社会福祉協議会職員の方と当協会職員を併せ約 20 名の方に参加いただき、昨年の 9 月に前期

日程 2 日間、12 月に後期日程 2 日間の研修会を無事に開催することができました。大橋先生のご講義や提示された課題は非常に実践的で、日々の支援のエッセンスになり、そして、一緒に研修会に出た参加者同士が実際の現場で連携をする時に、支援対象者（特にヴァルネラビリティの状況にある人）の理解や、生活課題のアセスメントやなぜ支援が必要となるのかの考えを共通して持てるようになったと感じています。グループワークで行ったことや話し合ったことが、実際の支援の場面で一緒に活かせることは、非常に大きなことであると感じています。この研修会を次年度も継続したいとの声が挙がっており、包括的な支援体制の構築につながるよう、限られた時間とはなりますが、石巻での活動の大きな柱として進めて行きたいと思います。

包括的・重層的支援システムとコミュニティソーシャルワーク研修会（令和 4 年 9 月 22 日）

2. 石巻から日本医療ソーシャルワーカー協会が退いたら？（その１）

石巻災害支援チーム 現地担当　西田　知佳子

数日前、多職種連携会議に参加した時印象に残ったことがあったのでお話ししたいと思います。

その会議で連絡事項の後に現地責任者福井から、令和 5 年度いっぱいで日本医療ソーシャルワーカー協会（略称 日本協会）の活動が終わりになることを告げた。A ケアマネジャーさんから、「日本協会がいなくなったら、それまでサポートしてもらっていたことを一体どこがやってくれるのか心配」という発言があった。A さんの心配はもっともで、そのことが心配だったからこそ、

日本協会は、大橋先生にお願いして令和 4 年度に 4 日間の研修を行い、地域支援についての具体的な講義、演習をおこなったのである。A さんの心細げな発言の後にその会議の市の担当者から以下のような発言があった。「震災前にはソーシャルワーカーはいなかった。それでもみんなで工夫して業務を行っていた、日本協会がいなくなっても保健師や他の支援者がいる。ケースバイケースでやっていけるから大丈夫。本人から委任をもらって手続きを行わなければならないケースにしても、役所の職員が委任状を取って動くことができる・・」

担当者らしい発言ではあったが、私は違和感を覚えた。その方は、「日本協会の働きにはとても感謝している。」と口にされたのですが、ソーシャルワーカーの働きがどういうことかを理解していないし、さらにチームで動く意味を分かっていないと感じた。

先日ある研修会で、“一枚の写真を見て、見ていない人に説明をする”という作業があった。その研修会には社会福祉士だけでなく助産師、心理士などが参加していた。職種によっても年代によっても、報告する内容が微妙に違っていてとても面白かった。その写真のどこに一番関心を持つかは、自分の仕事の内容、体験・経験してきたこと、その時の心の状況などによって、違ってくる。私たちは無意識のうちに情報の取捨選択している。専門職はそのことを自覚し、だからこそ医療も福祉もチームでの対応が大切であり、どの職種であっても対人支援はできるだけ多くの職種で関わることを心するべきと強く感じた。

3.　石巻市・石巻市社会福祉協議会主催「地域福祉講演会」に参加して

―　令和４年度「地域福祉講演会 ～地域の支え合いを考える大会～」　―

石巻災害支援チーム 現地担当　岩崎　隼生
平野　裕司

11 月 12 日(土)　石巻河北総合センターにて石巻市・石巻市社会福祉協議会主催の令和 4 年度「地域福祉講演会～地域の支え合いを考える大会～」が開催されました。全国的な課題となっている、少子高齢化や核家族化、ひきこもり、孤立・孤独、ヤングケアラー、自然災害や新型コロナウイルス感染症の拡大による失業・貧困、こうした課題を解決・予防するため、ご近所の支え合いや身近なところで相談ができる環境や気にかけ合う関係”多様なコミュニティ”のあり方について改めて考えることが目的であり、「多様なコミュニティで共に支え合う」をテーマに実践報告（2つ）と基調講演が行われました。

当日、石巻市内の町内会役員、行政委員、民生委員・児童委員、市内の支援機関、社会福祉実践者、社協関係者、市議会議員の方々が参加していました。

国際サークル友好 21　事務局長 藤原裕子氏による実践報告：「多文化共生の地域づくり」では、2011 年に発生した東日本大震災時の際、外国人が抱えた課題・抱えやすい課題（どこに避難をすればよいのか分からない、災害時にしか出てこない日本語（余震に気をつけてください等）による混乱、宗教上の禁止食の問題等）についてお話がありました。

また、その上で平時からのコミュニティの形成の必要性（一緒に避難訓練等に参加し、避難場所の確認を行う等）が伝えられました。

法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科 教授 宮城孝氏よる基調講演：「多様なコミュニティで共に支え合う」では、コロナ禍において自ら支援を求めることができない住民とどのようにつながるのか、地域住民との連携・交流を大切にし、支援につなげること、様々な世代の住民が参加できる活動・アイデア・気づきの重要性等についてお話がありました。

実践報告・基調講演を聞いた参加者からは、「新型コロナウイルス感染症拡大にともなう交流の場の喪失による課題、集まることの重要性を再認識した。」「石巻市のように合併を繰り返した地域、被災した地域におけるコミュニティの維持・構築が難しい。」「自助・互助・共助の重要性は認識しているが、高齢者等の一部の人だけでは限界である。『住民力』の限界に来ている。次世代をどのように巻き込むのか、他の地域の実践事例等も参考にしながら、石巻式の地域福祉（支援システム）のあり方を考えていく必要はあるのではないか」等の発言が聞かれました。

今回、支援者だけでなく、地域住民の方とともに石巻市の地域福祉の現状・課題を共有し、知ることができました。そして、今後取り組まなければならない地域福祉の課題等改めて知る機会となりました。

4.　石巻だより

石巻災害支援チーム 現地担当　髙橋　としみ

石巻市渡波地区にある宮城県慶長使節船ミュージアム「サンファン館」に係留・展示されているサン・ファン・バウティスタ号が、一昨年の 12 月に老朽化のため解体される事が決まり、解体前の見学する期間がありました。写真を撮るのを趣味としておりますので、早速最後の雄姿を撮りに行きました。特別期間ということでライトアップをした船体はとても美しく夕日に映えた写真が撮れました。建造した当時は帆船でしたので帆をあげて曳航した事もありました。帆船はやはり帆をあげた姿が美しいですから、この時も写真を撮りに行きました。でも、一度の曳航に 400 万円ほど経費がかかったと聞きました。管理維持にも大変なお金がかかるようです。

解体には市民の反対運動もありましたが、木造であることに加え、海水に浮かべる停泊状態での展示だったこともあり、腐食などの老朽化が進んだようです。県は補修や維持にかかる費用や木造

再建の技術的課題などを総合的に考慮し、保存断念をきめました。サンファンはいろんな機会に見に行くことがあり、解体は個人的にも残念に思っています。解体後は大きさが 4 分の 1 の繊維強化プラスチック製の後継船を造るほか、復元船から取り外す羅針盤などの部品やマスト、船尾外観部などは状態を判断した上で保存し管内での展示を検討するようです。2024 年度にリニューアルオープンの予定ですので、機会がありましたら、ぜひご覧ください。サンファン館は高台に位置していますので、太平洋の海原が一望できて一見の価値はあります。

【サン・ファン・バウティスタ号の概略】

仙台藩の藩祖である伊達政宗は、江戸時代の慶長年間に、スペインの宣教師ルイス・ソテロや家臣の支倉常長を使節としてスペインおよびローマへ派遣した。これが慶長遣欧使節である。使節は、外国との貿易を実現するための交渉を目的としていた。慶長遣欧使節が日本を出発したのは 1613 年 10 月(慶長 18 年 9 月)だが、これ以前に海外貿易や造船の構想があったらしい。この計画の為に建造されたのがサン・ファン・バウティスタ号である。その後日本は鎖国になりますから、貿易は実現しませんでした。

【復　元】

宮城県では、昭和末期に有識者会議がサン・ファン・バウティスタ号の復元に関する提言をまとめていた。この構想は平成の時代になって進展し、宮城県を挙げての運動となる。復元に対して 5 億 6000 万円の募金が集まり、仙台藩の史料をもとに復元された。石巻市中瀬の村上造船所で復元船の建造が始まった。進水式は出帆 380 周年にあたる 1993 年 5 月 22 日に行われた。その後石巻漁港に仮係留されて竣工式が行われた。復元費用約 17 億円。仙台港や気仙沼港、東京湾で公開されたのち、石巻に戻りテーマパーク「宮城県慶長使節船ミュージアム」に係留、展示された(参考文献「宮城県の歴史」「仙台市史」いしのまき河北)。

「サン・ファン・バウティスタ号」

名前の由来は(洗礼者・聖ヨハネ)

今から約４００年前の江戸時代初期、仙台藩主伊達政宗の命により、

石巻・牡鹿半島月の浦から出帆した

慶長遣欧使節船。

髙橋としみ撮影：最後の雄姿サン・ファン・バウティスタ号

〔追　記：　福　井〕

～復元船サン・ファン・バウティスタ号、映画「レジェンド&バタフライ」の撮影に協力～

2021 年秋に予定されていた解体工事が差し迫ったタイミングで、当初撮影は厳しい状況だったようですが、映画制作会社の東映京都撮影所からの熱い意向で、復元船サン・ファン・バウティスタ号で南蛮船に乗って航海に出るシーンの撮影が行われました。

サン・ファン・バウティスタ号の撮影は 2021 年 10 月 6 日～8 日の３日間行われ、連日約 200 名のエキストラが出演したとの事です。

石巻の市役所などでも、大きな映画のポスターが所々に貼られています。今は解体されてしまった、復元船サン・ファン・バウティスタ号の最後の雄姿をどうか映画の中でお楽しみいただけたらと思います。

映画「レジェンド＆バタフライ」公式 HP より

5. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 書籍販売】

『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅣ』

の販売を行っています！

発災から 2011 年９月３０日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011 年 10 月から 2012 年１２月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災

世帯支援・市民活動支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅡ』に、2013 年 1 月から 2014 年 3 月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。そして 2017 年5月、2014 年 4 月から 2016 年 3 月までの災害支援チーム、石巻市での復興公営住宅への入居支援・仮設住宅被災者自立生活支援・グループワーク支援・市民活動支援の記録を『バトンⅣ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせて頂きます。

※ご注文は注文用紙で承ります。（注文用紙はホームページからダウンロードできます）

お知らせ欄から注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/about/publish_index.php

注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/news/news_detail.php?@DB_ID@=1393

6. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回第 4 号発行予定

令和 5 年 3 月

◇ 編集後記

事務担当　金子　小夜子

2023 年 2 月、今年初の災害支援ニュース発行となりました。これから最終年度を迎える令和 5 年度の活動が、「石巻市社会福祉士等相談支援業務」事業の集大成、となるようにと願わずにはいられません。

2022 年も地球温暖化の影響による気候変動が原因で、世界各国で大規模な自然災害が起きていると報道がされております。そして 2023 年 1 月、複数の国において多くの人々が異常気象を象徴

するような甚大な暴風雪被害に見舞われております。

多分、これからも自然災害に見舞われ続ける日本では、この石巻市での被災者支援活動が基礎・基本となることを祈ります。

∽ ∽

新型コロナウイルス 変異株流行の兆し 症状は軽くとも‥

この冬はインフルエンザにも注意しましょう！！